823
M78N2

岷江入楚

御法

40

Freer Gallery of Art
Washington, D.C.

御法

五十一歳　薫四歳

紫上病悩不本復請出家難給事

三月十余日紫上供養千部法花経　於二条院有之ケリ

紫上遣消息於明石御方事　匂宮為御使

法会了各還六条院給事

夏二条院病悩明石中宮行啓事

住二条院東対給ケリ

紫上匂宮ト御物語事

源氏君中宮等御物語事

八月十四日明方紫上卒去事

六条院仰大将令落紫上御髪事

大将奉見容貌事

紫上葬送事　六条院出給ケリ

致仕大臣訪六条院給ケリ

秋好中宮訪六条院給ケリ

沸浴　出　以秋為季名

同　あさあつされは浴するかる秋をまたの中にさ夜さにと添ふ中の題りは

秘　源氏五十一巣の巻、うつ秋ものくれのうす　出弄

笑　むらさきのこと秋くせのくれ

紫といふうらつかひする名し沸なりの後　秘　下とせうらのはてす

若菜の下にかくくうかうてうて後とにくくみするうひまうて

おらかくきうかあうねと　さうしけうかうる炊ひはひみいあうらく

むさしとうやうこまつて太守の炊のさ海たり

桃のおもひ月しあけくるす　源のゑうて名をそ思ひしまへなつり

ゑりしふそてはをとそれさこうし経りんするい　秘　源の御名を

ふるうの作名りみい　秘　紫との作名申しし　弄

うしろあうてきれうしこた　秘　源子のなうれとぞうり　弄

笑　紫とても沸子のなつまい名やさとて思れとも源氏の君の跡さし経り人

とうろうしこまして

たりいまけうせをらん　笑　邑ときらにさうして名内くの家のなを

ふいあうさ海けり　秘　さ海をとくてうりとこさしとめ

さるいつう沸名ると　秘　源のの名てし紫上の名をむさ経てくされ

むくれ花のらくへしとし

おうしうらうきての作もとらけんと

各留半庭紫花葉待我閑落同行人

法楽　照イ　禅師五会エ　謹　筆

さうなるはとも侍ん　世を捨て此世のよくおこなひ付のさまし
同しふなりとも此世さてもて　りやうに別におこなはんとし
ふかき後世の一道へのふとしくおもひふかし
いともふかりしさ　秘　此ふとのなかりしきさし
ほいふかきかきへてうり　河　河さへてうりは古人の云あさくれなうし今案はさき
さへは例のやうとあ知し幻也又は古今説道世のする也と明石といさるか
行かし知まさやうにあさへてうりはふてうかくてらりもとたし
されとも云一生くしとも迄るにはさまてつてはのともへ云かつさはさ
行ありおもうりぬ危うれとも云　云同云し
花　あさへてうは致あさされうると同しうへしあうくは云とみみれ
云ふうり花の事ふあされれうり大君をてつことを云河海ありはあさこさ
云ふみ又へせし者仕う
秘　花食るはあさされうりとも云羽とも　云河海ありは使ニさ云しとゆうり河海ノ説
能ク人ハさたし　義安同　翠ニ清ニ　こささうの字清也
義　河説は海こ去ふし　と　云花説はあさされうりと同ふひとけあるさ云し　と　云
かる河ノ説ニ組とも　云　義同し飽はあさへてくしもしと文章清ノ之

のするそかりあさくくしてさみもしかりのこさゝ人の字不従ニ去云
追ふことに第ニ又幻也おさやりはおさゝへてうることはとまき
清ゆりしあくてもこみとふ　云
義　源の中りしあくてはとし女は夫の家をさるもむの地して後の理し
まう清身をとを疑ふうり清し充りやと
秘　此女子うれは庭やうしとしあるかうし深あくうきさとてかみ
ましうわ此身るれとしかりしかると云ふはみうくはうさえて清
さたしへうく後世をはとかくうさうし　翠安
義　此ある家をゆうし済はぬるすをこ此ふの女を庭瀧深ニさ本りあく
さまさをのあうりとあるすのなし
私秘異義ノ家はあうす義ノ範殿へし
わけさやうふ　義　紫の迷ほし子離は入りも此世ノれうかへし
七債のあまるとも実の常らしうり　此源はふかくも多り鏡はぬし
こともしこさ何さふみ　此院ようとしつは一人は枕也し一人ハ
同其之さ何はのらうら
明石女御ふあうへし明石女御云衣のするなあく旅らく云ね

案
給へりとさハ明石女御中宮まして給ふあまりことゝいふみえたる内ハ
今上一　朱雀ノ皇子東宮ハあかしの女御の御腹の皇子をさし給へり
ちハ秋好と明石中宮としる明石女御立后明石の女御をさしてのたまへり
いそのかみのよくつくらる御かはりやうをこえつる
秘　ふりゆく御かはりといはんなめし　案同
花　いそのかみハふるき御かハりといはん為也一本に云さいふあそのかみのとて
世くにつくる御かはりやとてみえけるとさま見ん河海
案　一本に摩訶般若くにつくる御かはりと書五百塵點劫の事とも海に
見えくらり案云あまりふことゝしきたれや
花ちる里と　案云　抑ハ人みなことにさきぬるかたもなきさうにも
此花上の事ゝいへる葉とそくゝり
重ねかけしのことを　秘二条院也
みし人のめくりこゆん　秘　此花上の御宿所也
案　廂より御まうのめとてめくる御宿所とゝくゆかり
仏のおしへのたかたみのさかたうへ　案　織土草庵至岩佛出之
案　又花此不遠則極楽之莊嚴をみるやうに侍るなるべし

をしきらむとこきまくへさく（ほきさくを）　抄　太子ハ法花の法を習ひて切法會なとし
多くさるゝ所とのさんたんの教へを
八講ハ五日十座にておこなふ之日ニ云ハ中日ニ當て薪の行道あり
行基菩薩の歌を唱明して行道するなり
法花經を我得しことは薪こり菜つみ水くみつかへてそえし
採薪及菓蓏隨時恭敬與　さんたんと云ハ讃歎
一かくの意を讃歎なとくくく法則にいはく讃歎し
私此不分明也　所詮其時
そこらの法にしひうのこときは　案　見渡す親人の群集の所をいふ
たゝ鳴り人の声のさらにて讃歎ノ声おもしろき
抄　うちやすみたる法の人にも見つたる事も心とものく半の法
ゆゑにちるくあかるへし　抄　白き也　案同
この也しく
をしからぬこの身なからもかきりとて薪つきなん事のかなしさ
抄　此身ハ採菓汲水の古し此身にて菜つみせし人のつとめは
下して以ゑ前日にて於むとさくいゑる西面とし

奥この身菓つりよせうり

箋 此身に採菓汲水の出ありて身くおりたり行し給へりけれは
方便品に入無餘涅槃　如薪尽火滅佛化の縁尽て涅槃
入りいふの心なくなり

箋 薪こるふ事まふりつさくめんのふへの事し余上の事は此薪は
千歳給仕の薪にいあら法の薪尽火滅の薪なりといふ
抄 れ还り出家してさとりをひらき給ふ也
いまく御とくの座衣服もいつくとめてまつりしてらめり
身をさへこうりいたるへとをもしめまして此世の御命をへ法そわりの弟子也

河 採菓汲水　拾薪設食于時奉事經於千歳 提婆品
仏法をきこしめす後のりもとゝ云ことくれまと随敬して千歳
給仕のうちに此世をすてくくし給ふ薪尽きたん
ひかりを同様にりよく仏の出世にかへりたまひしを
抄 于時奉事經於千歳 提婆品 千歳給仕之出し千歳給仕をし
くう傍にまゐりてとそしありて千歳ハ数をいたり給ひしを
身をとゝのへにうちあらせ給ふ数の事

箋 此鼓ハ撃鼓宣令 提婆品文 の出あまく修行をうるつとまてゝ
いうりこ此鼓ハ佛法花経を説ます時聴衆を集ゆるそのゝ為とし
霞のかかりうかへくらう　奥 皮自金ニ告くし
出さつく霞のかかりりりのくにともへてくしくへして立かりり去れ
なくこまつみなとをゆりゆく　抄 出家の上乎生まつの出を上候へとも
奥 出家ニの出あとまてもまつふ出をゆるへしとと 打人字にかまう
りちとうりれさうく行り
箋 示のかまゝゆへ川ふ滅く
百千萬さうへ行つまいのゆとにあらたまれとも鼓そにふりり行
まうりれまりひとくこさうりふかりかと

河 陵王一名羅陵王古楽長曲 舊序 入帖 拍子十六 終帖 加拍子 舞人時吹安摩序 二切 破 三切 破 有舞 入而破 四切 中古已
通典云大面出於北斉蘭陵王長恭才武而貌美常著假面以
對敵嘗擊周師金墉城下勇冠三軍斉人壮之為此舞以効其
指麾撃刺之容謂蘭陵王入陣曲
尾張濱主云高野天皇御好此曲仍奏御前還入時又吹汲陀
調入有勅以安麻為入音遍此右老所傳也　蘭之陵王可念

おしはかりて急になりぬといふは後急の急のなし
或説　新苑陵王急也　伴曲急上太鼓也　楽破急也
秘　河海抄説可用之　筆
今ふ人のおもはくなきうち　此の身のつとめなくへし
筆　森人（さ）ふかきうちて人の行し森ノ間に肩ぬさしうち有之　初秘し
融安衣ある花鳥にはなつかしさのなりとも惜し　已上筆し
いつはとくなしと身をおもひしうち　秘　心の月もなくへし
こし此のころのおもりしに
此ほとりの心よしの月かし月なくてこさなきし
まして夜なその月にはあそうう　ある散里明石上のうなといふ筆
秘　六条院はきくは此のくりしのまふゆゑんよきあちうる里なとをいふ
安　女ホなましゆうしうまをとこりなへし
しとくにとりのかるて　筆　此八線にそうもなり
元をこさうのれかこさうく　筆　見うとさうりかうんとし
人あしあへなまの法ふのうまたのまよくせくにともにふ中の契りを
秘　御法の身をなくへり安法く値遇のまへにいとなるまことし

今日の縁をは此のあれはもの身世をなくれ花安法の契りは後世まてさと
哭　一二ノ句身と結ふゆゑとらしてにと此ふ法又値遇のこころもと有
ふくさるくあつさの未世の法の心もやえらう可存
筆　佛法よ身をなくへり安法値遇の縁はまして後まし行あり
我我生々見諸佛世々恒安深妙恒修不退菩薩行　已上筆
哭　あちの里と心よしと佛申しよりこさし
迄あ（尔）答里　法ひとく契りは深しなくこの世のとくあさくこれはなりとても
秘　明石と思惟をして後人の心のしてなとをして行して有
此年の里りのましこれあちのうさしの性し
哭　あちの里は明石上はかうりて心からをさんなるなのいまりし
うさき人へなりの此家もそのなみくさう
筆　あちの里の性さうしてなれは家もあうのまくなりといふ筆し
此人は浪云を承せしと見いさとかなさし　此筆云大のさの行り
とくあさとりはをあちの里のうしめけまへりとかれは家身
のうりと承せしりや　筆安
此にてくなん人の心にほせんかくりなとし
筆　あの禅懺法

あつくさく　箋 弁當夏の頃くあつく病のまさるへし
まいのよりきにたく　紫之上病中の折をとゝめけるを
箋 此巻細書なとに思ふ事の見えし又月もあまたとゝめ置てふかうまつりての
事は紫上の病悩のよりさまにあはれたゝしくもあるへし
中宮此院り　抄 おりゐの中宮なり
孟 明石中宮と申は始く中宮と見へたり二条院は紫上の
箋 三后の内一人は此中宮に嫁させ給ふ紫上は御中宮は紫上の御養子なれは　紫
東の對におはしますへけれはこなたにはた待きこえ給ふ
孟 二条院の東對を中宮の御休所にせさせて寝殿になくてく東
に御まかり中門廊階なとあることなれは寝殿を紫上の御方にして　箋
紫 二条院の東の對は中宮の御休所なるへし紫上の御寝殿に御座して
紫上は西の對して又紫上一西對へとを　言可説定其ま此へし紫上一方は
二条院ふしの對なり
抄 寝殿ふは紫上のましますと東よりは御も中宮の御座まうけ
されは東の對より中宮を待給ふて殿をまかれて此義この説を
紫なとにも寝殿にて紫上の待給ふとみゆる

此世のありさまを見はてすなりぬるなとの　紫 源氏なとよりさきさよりなをも又に
ちらこといゆくおもはくゆしもせいの
なき人とのありさまを見すありませ　名對面を
箋 行啓には侍臣の名謁あるなり
孟 名謁は行啓の時召宮に行啓は寝殿へ南面にむかひて紫上
ひとりに侍臣の人ひとの名字をきかすよし
紫 河海 中宮行啓儀　北山抄云六府次将以下近衛佐奉懐
東同行事其外官司兼申収将着帯弓箭供奉入御之後王卿名
對面次司同之諸衛不脱弓箭着褻座矣 已上第ノ分
久しき御對面の
紫 明石中宮と紫上と寝殿にまします久しく御對面なかりし
今日いとさいはへるとそらやしく　紫 こよひは中宮と紫上とおもきて
よ家の御前に源氏の休ことまかせをれうるといへと
抄 源氏中宮の御休所へうつりのあらく又さらの御方へ渡りまゐて
あきらのまへうとを　紫上中宮とありしくさいかはかならすに此物語
ときくくおこさのまかせとし

うらくりおりしまして　孟 中宮の御方ひとつくへのつしにておはい
しは寝殿なりおはしませんなり
紫上一條にて中宮おはしたるのかたと紫上とのかた〳〵御つほねの御すみ
まうしけるしとし　孟抄
秘 篇名、中宮の御方とはいへり是は紫上の御方也中宮の御方の御局
御おはしつかふ人をは紫上の御方へ参りて語つたへらるゝ也紫の上
見えしこゝにましませしとなり
箋 おい紫上ふたつしはらくは紫上は寝殿中宮は東對とてまたれく
よりて座をまうくるは西の御對の御かたにうつしまゐらせ
秘箋ノ義可従也このみつからせおはりくるしは中宮東對か
ら寝殿へ紫上うつらせ給ふへし御出あるへきも見えし紫の對に参
るは病中なれは不出仕紫の御方是とも寝殿へも
まかりおはしまさぬにし　箋説
入れ給のうちにおはしあからん　箋 紫の御かた中なり
御おほしめしてはいほ後々のつすゝめへしされともはかりし
ふしとおほしつらくはつしまさゝくらう何よおはれなり

寝殿の御西面にて紫のことはりなる性をうつくしんせさう
見うらのそここなりけるつく　秘 物の外中宮服の兄なりし
たましうれしおはしつかへ人と
秘 中宮の御方にて中々何とてうく御もてなし給はれそとし
申しをみたまとは　秘 あはれなくいとほしくし給ふ
案 極くしきをみたまふことくしうしねなり
箋 この御くの極み何とあく女房たちのまを中宮へ申し置給
へるかしちしとも哀れなりせそいはのこいねし見そ哀傷の本の心なり
あかまさろうかは花し哀の心ゑみく道遥院は奔をも称せられし
を後柏原院叡感ありしと云々
御と絶なきにおはしくそ　河 中宮春御読経
是は御のちらの御かしこに　孟 家の御方とは東の對してあかさしあく
季の御読経のまつりことなるつくし
秘 中宮季の御読経とはいへりしとて紫上一家に方り
入りのあつり箋云花鳥ノ説可従中宮の御かりまにて
二条院への御まうしこと見え自筆し　箋 篇名東對と中宮の休息所（隠居所）と云々

箋云六条院へ帰らせ給て来の御らむ　みこえん自筆
箋曰春の頃紅は六条院にふくき冬のふゆなりとこ　こ
私此末の詞よ又は冬の頃のよしなみとすかとし
中宮の又紫上の御かへ詞かすへく御返事なしく如の御ふ
時まゝくへ上ことはりとちかへ給はに此御消息の時も六条
院のひのしの御前へ持のたまへしまいの返り事の御ことにて
てかく御かへりて但此末の冬は春の女ん(?)とさら(?)箋に御筆
の六条院よりの消息あり(?)と推すへし　秘　紫上の冬かたらへしかるを
この冬はあまさにの御中まよ
箋　紫上御紫上の返しまひかくのかへり
まろか侍らはさりんま　紫のちれとのたまて
まろは門の方へりこと冬ゝかりも　中宮御詞也
門のうへはかたらて　秘　冬ゝかりことは中宮もくとして紫上を
箋　さくはらくらし　同
おとれまさりのまいなにうらに候のまひく　秘　紫上の御心
白冬は後よ二条院よりくはへり
さらへからんあり(?)は御みちとまつるかへと
秘　紫上の家の身なとはのかは御めて西行か詩(?)よ
何みはさうふのたまをとまくしきすり後の世とへとまては(?)く　さよ
めてもしかなりかへし　箋　弄
河若人敬礼公所及至以一花供養於畫像漸見无数佛　法花経
曽非種處思元亮　為是花時供世尊　黄衣
箋　此冬白し姫冬は母一冬なり　弄
此冬とし姫冬と　秘　かことはけのまいりまて
なほとも仏まいらこしとのまし
ことにこれは秋風も川なとらしのまて
此のいまはよろしくるりの　秘箋　安り
河　秘院(?)はいかりの冬の風なれは身みしないりく風なりし　さ　紫
中宮はまつりのかいまんとかりをて
箋　内裏へ参り給はんとかりて　同　御里六条院よりの御事也
今をりし御らんせよむことを　箋　紫上の心ふかくやうへしくは
まりしさ程みてらあさ御けたとおほせとも此のしるしてあるしおかし
てさへ中給はねとなり

うちの御使の　　内よりあさからぬ使なり
あまさゝえひまなう給ハねも　　抄紫上中宮の御方へも
紫りの御かくさやうにもえおはし
宮みてもらうのみなもとり　　抄紫上の御心ハからうりまうでし
六条院よ中宮ハ御里住し紫上の御方両方ともに御中
おはれよ二条院へ又中宮の行啓ましく宮そまうりまうて
ふる紫の二条院へ中宮の御出のまうりとし
くちくいくきれしと　　箋紫上の狼藉自他の御称なれはこゝ所へ
中宮を内へ参らるゝなり
こよなうやせ給へれと　　抄紫上の称し　箋
こしかたあまりにほひおほくあさ〳〵と
箋あさ〳〵と前ハあまりに匂ひのおほかりしなるへし
阿さ〳〵とは物のあさやかなる也
此世の花のかをり　　弄桜に二度まてたとへられたりよそへ
風にもとく吹ちりしぬへし　　箋中宮と紫上とは御続きしおなしく
此限まへりてい　　中宮の御あこ源の詞し

おはします中宮と御物かたりして紀のまにふかすかきりとて此上も
見え給ふもうれしけ　　抄紫上の詞也
絵りしいつかゝおかりしさいひ給ふと　　箋ゆかしき古き也
おくと見るほとそはかなきともすれは風にみたるゝ萩のうは露
箋をくと見るはきゆるへき縁をたとへられたり　弄
抄かゝる萩にみたるゝ物を心にたとへられし
なとの御こゝろをとゝめ給ひておはしまさすやうりしてみゆへき
きえてむかしへ　　箋枝の萩にはさきの病気ゆへくるしくもたとへ
弄危ふおもへ萩の風をとゝめかし源の見ゆる所なるへし
箋秋風の前栽のさ庭にそれはきえまてといふなるへし
よそへられたるおりさへ　　抄かくいふさへ萩風の吹出るなそへ
今はそてくらべられたるをとく秋風の荻の露もこらへりと伝
それより見ゆるのかなるへし
源氏
やゝもせはきえをあらそふ露の世にをくれさきたつ程へすもかな
河　末の露もとの雫や世の中のをくれさきたつためしなるらん　僧正遍昭
やゝもせはきえをあらそふとはさきにきえくへきてうとするかやの事

箋　いかやうにせいし　箋　露の中にも消えうとてもつくし宗祇
あるしとしれやさうなきのさ後よ見えつろし下の也はさ炎と消えとし
御くもせは　勤やこそ甚しし
秘　源の斎しき紫上ぶかくき給はましきとしことそあかつきこゝさと
中宮　秋風にしばしとまらぬ露の世をたれか草葉のうへとのみ見ん　同歌
河　暁の露は枕にも置くべきを草葉のうへとあるはいかん
箋　川とく
秘　中宮の御おもし世ある無常をとりへり成身ともすりとうつる
あとやとやくる今の也なり
ゆのかしまかにゆうかりこと　源氏中宮紫上なとと
かくろくさとせさるん　秘　不老佳の也し
後撰　ひ　ゆふのにきをのつるあすのいふとせをうしてあんとやれのふ
箋　紫御をとし
今はかりてせ給ひね　秘　紫上中宮へやりすまゐ給し
いとなめけぬ給ふや　秘　絶ゆすまく紀とこそてすすこうらんほう
ひありうつし　事日

さきしくとりくきくいこさいて給ふ　箋　地の御事なしゆへまくまくさくり
給ひしまおおもとさらり
文もうへり給はく宮をつろりとうきうりたくおもれ
秘　今はのとうりちを見へありと中宮はうさうりつく嫉しうそつるみ
女　かりのく給ひ給をさらもを嫉しくを又一入悲しくまとゝ
明くれの箋女ふ　秘　夜の明くるけふし
箋　世との無常のうしいまくすとしをそのれさてはいみるすいかうの御うり
にそのをまとと　明くれいは明暮し
給ふし給へ　秘　御おさめし給へなきさしなり
くらいまくさうのさ由なうを　源氏夕霧よその御ふ御し
さらしにのおいありうく　箋　紫上御家の本もとし
そのおかしはぬくへく　清　紫の本意またく給へしと
ことりかけのしくる見えすうのまふ　夕霧の源とこらふ也し
涕地の宣ふと　秘　大将の御し
りのゝ宣ふとの御家のすをとれうらりゃうりやすき人とと
の御いのとういかうつしそとこに　是は受戒のうけし　まへまこゑ

秘 出家の功徳のこと

一日一夜もいむことのしるしこそ

河 一日一夜受持八斎戒一日一夜持沙弥戒一月一夜持具足
戒以此功徳廻向求生極楽国 観経

出 一日一夜斎戒をたもつよりも養身一日一夜之果報を受けし
往生礼讃云中輩中行中根人一日斎戒処金蓮

御しにはいつくたのもしうこそてさせのつらく後の世
秘 御心をとらくなりつれはひとへにかならすしも
御心ことにこそありさうて後へさ
心深くおこなひのことに
らし比たるやうやとおもひけることよ

秘 されとても後とは思ひのうへにし
葉 花はなく後の世後不覚への水いとゝふかう
秘 夕霧の心

夕霧の思ひ上よ心のうち何すいまうりしなり
ありしなりも
秘 彼心の有しさま
御しるしこそなねなかと
河 数をとらにさうて多くの家とりもたちまち行人果して出すさ
奥 数をとらはさきて出すとは海にして思ひいとゝて思ふ人の数を
きこえてもおしくめすし来多のやうかやう面白し

ひさしあるところへ人のまへ 花は夕霧の未すきぬ川おけてと見えると
おほとこそつらうかつけ見えてまつりかへり
秘 源氏の思ひの御さまを見へまて
思ひのうへの心をとかくるふを
うくたより心とも
秘 夕霧なり
秘 源の狗なり
花は未すきぬれうちうちかへし
そのゆくしありあれみとく
奥 そなたの心としるをもると続へし
心のとにもえあへし
葉 夕霧の心なり
はやくゝと
秘 光ノ字し 奥
こうくらちまかりかれなる
秘 はくちあるもちはやとうそう
そうのいつ思しるの筆のうく御かうもあとゆりうへと
秘 おりしろき御しし夕霧の心とし
恐そてたまよしことも
源の御すかし心をとうらちのうちうまへし
いみしつとうるもしとおもひける
出 夕霧の上葵上のまたまとをいつてし 奥秘葉同
おり去くいまさ
葉 多後始末のことを身よりみゆくとこうのふすゝ
なりうそれみ深思すといふなくいなをそうかりしさとおもひけし

やう〳〵その日さへこのく　葬送のこと
うちなきつゝいと　箋 川は面白し云々
河 うつせとかうとかうつくしなくさめ侍従のむかうくりかへて
孟 秋川かうとくらくなくさいしとあれと見いさとなき心面白くや
えらくとしたる鳥辺野　葬斂の儀のさゝと
いかしさ侍ありあれとつとくうなきさへりかく
ありれうつさ給ふり　箋 おほひの儀とも此人もちる
宮をとおもむきらしく
秘 源ちかくの此人おぼのむけしと見へくるうり　孟
いかりしこさ侍　箋 源氏大上一夫見をふかくおもひとれわし
おほの見の侍りく君　葵上のうせたる時のすきに出る
月のうかれ河さつりん　秘 葵上は八月廿日葬送なり
孟 葵上の時のことなりとてよみかはし
十四日のうせのはかくこれは十六日の儀なり
河 十四日に源氏十六日に葵葬送也
或 十四日にむかしの葵上十六日に送るとしたるる條なし

孟 十四日送よし葵上の葬は十四日なし日数をうつ行ありれと月のう
不見乃葬送の夜ところ
秘 送るといへ十四日はうせて十六日みやつて葬送をなし夜の儀にいつる
日いつとそうかうなり　此は箋も云々
古人の説にようつかし　帰給のさ面し
此人の露しもかれてうかへり給ふく　箋 此人の露もかりの宮此
風の露いかくてかう雲露はかうちて給ふに世中かりしはくきゝもし云
むかしかうの侍わい　源氏侍出家のこと
云ふかそのかゝかそしらも　かすれの時世をとそむくいかなくかなし
よう河おもうとくまる　秘 大殿の出家なりし
うせ此ゆうもかう　秘 大殿の御心
箋 此人の段かうと
むかしのこと
此人もしこととおもふし　箋 此人は女さしく所のなににさうくむかしの此人
みかきうの夜との昔の御ちゝせし　秘 源氏の世をすてかいしるし
おほくみゆくと川すゝかりくの静のゆかなくていしくせ須の

むかしくもかうつていふかひ　細 師説の詞也
は念珠も源の玉をさゝませうつろなき奥なり
孟 常念くらくたまり老人をまましく家源をいまうりゆかしかん
弄 此歌を
いにしへの秋の夕のこひしきに今はとみえしあけくれのゆめ
細 あけくれの夢へと今はのきはにおもひいたし
箋 明暮の夢も紫上の給ふかきりにはかなく
はかなくきえ　私いふしへの秋の夕は葵上の
御息所の夢も紫上へきかくれ給ふといへる
まうといふ頃の御しかくなくなりのあとをはかなくなる事を
あかりしをうりし此御方の御葬の夢は紫上へそうり
きうりのまゝきの事

空 いまし夕人ありしは葵上の御しされと御息所に對しくらくらう
そうりきん　細 弁よりおもしくて也
かるまりろう念往　年九月は紫上うせ給ひし
ふりてとおもへくもあらてこれ　忘これは源氏君のなし
いまへの源氏のあとき　細 源の詞也
紹よこゑのおを給ひしめく　案 源六つの時葵上の紹をとく

細 むしゐのゆかりしをまとは後ありてきり給ふかきて
さ何への時葵上紹をとらくもとれのいかゝしる後ありそれ
ともへこれは家方の上をはかなくもとなひくもとくまれかうへ
紹かうか詞ありへし
箋 かくり風さくれかうかの事もそれを始めへはいとしうう者そとと
いそも見まえとうりうかしくいひたまふを世のと
孟 源氏君三つの時母君はうせ給ひし
細 母更衣外祖母桐壺更衣の母也
私此御夕顔上葵上藤壺女三宮なとし　世の無常をおもひ知れるのゆへと
仏のとれおもひいとうはかなく
のち後しおりふしとうりみそとと
みあしきりしとおはゆかりのしきさ　紹のそれそうはかなき
くり世をうれきなくとし(?)やうてうりふ文さりと
見てもきしまき　細 世やましきさし
うつとうしぬなり　内裏より下し
紹いのさむくうりあい　あかてもさきのほとさつひそうり

なにはさるゝ宮仕にまかりつひまなとし
おもしろしかう君のおとたゝい　箋 源の御家のなし
おもしろき君の御ことはすくあるとも此物おもひのまさるれは御家に
源の給ひ難うましくしとおもひしごとく御心しきれはまうけて又息
さへ御身をも世にはなれせぬさまともつらき
ちくのおもくもなりはまくとおもひゆるし給はね
箋 致仕大臣のやうれなすさをりもてさへぬへきしともにてさる不思議なる庭
むかし大宮の御母宮へ　箋 葵上にて致仕のかりしとと
ひとつのみなそかし　抄 八月まれはなり
かの御身をおしこめへのかりし人　細 葵上をおしこめひし
父母もをしはなくなりつゝのこりとゝせぬしくへと多くさうし
とくれさへさうかりかとしうらき　奥 果の露おの草下や比ぬ所を
致仕大臣 御子の君人々おほしゝく　致仕の六男をうりし
いみしくの秋さへ今の世也しくわすうし御にも家にておさきよふ
箋 いみしつは葵上にて今の世也しては君よのきに小家もとをよかれ
されく今のなかりさうりとさしあれおし御をも葵の身も家をもおさき

そらには君の名なし
抄 いみしくは葵上をいさへり　弄日
源ぬし 露ときさいはむかし今とてもおもとわしくれたへてさ秋の花こそ従ひまもれ
細 世のかの世をあのかなし給ひなとゆへり
奥 花さうり　私 葵上一生ふかくしいはせきもそれの懐旧なし大
くさ秋といふ月のかの露をときさうとさとふ八月世を世のまひつれはさ
葵上の時はおもほえなかりしや月のかのおもかくしとあり
されともまつは葵上の名致仕大臣への御返事なれは懐旧な
しとはふよりこのもふかし
御君のまつかるは　細 悲傷をもかく治くしとそ人の名をもて
よくおほしめすさし奇かもしも見へくらうり　奥日
箋 この君のまへあるにとは源のそひのうまさきに君名まへ返すさえ
かうかりしくしの乙ひくはいかにとし
給とうかひくは君よりくれとおそくかのまひつさきおもく此御君
と海なれは　源の此返事こうかをかりしくは致仕大臣紛ひまはし
て物とも源氏の御君よりくしとうかさくれくうかやとおもとく然

かひなくてはなそともしなしかいふかへなかりけり
ありとあれはとはれてそたのしとあるかはぬれはとりていさきよう
そののちをもうしろのおもかけしのはるへきあはれにたえぬあはれかくの
はてのかたの形見にあらむとすとも心をこゝろとたのむへき
御返し これのたゝしとも

凶
侍りけるをきゝはへらんとしたるにたよりにしてこのはにおちて
あはれさはあらぬにけりとかくことのはのたえぬへき
故信清卿しはし四十九日の間は北野大納言通光卿のはかれにあらさ
とはしくおもはるゝ大納言殿のちのかたみのほかはさりともあはれに
さらさらにしのふにつけてのちのはかなさいかなの時もやうもなく
やつれてかくのいろを見はてぬるかとおもひなからふる
私云 宰相中将はやかて作者歟
うちつけに見はしめたるはなすゝきしのふやうもなく

凶
今井九条主君父母喪服一年 葵高に葵上なくなりて後 細 軽服し
山吹はしきさうしましゝは涙くれて後のいまはしとはかなし
さらすしおもかけさりしあはれいふとて墨衣あさくなれとしまり

凶 哀
妻二等三月服暇廿日
素服変葵の時凡下に かさなりあれはとて墨衣あさくなれと後て
紺とそうとあはれける 葵和に手やうゝは濃く色のこさ
軽服のうちに是れはさなき色にくゝ薄くなるへし
世の中はさはかりさりめてしらさきくへと
紫式はへいそ見まれ式はいけきは公のかりおもうて人の色
となりなむとて 色まさる紫さそ見えむの袖を
さしとあはれしき これはつきさへの紫さを御しこゝやなと
三條より色は大くらたらに源氏へも袁と源とと語せよ
ましてそのうちは 又わかのかきも紫さをとうしへは桐もくとなる
かくなくなく見つけさるものしとし
身はもつましくつらからまりなれなり 紫乃女房手なし
山門には式部の尼と和泉の涙とさ山伏あとさもあらしこ涙にみなり
是はせいゆへのさけの衣
細 枝林中文し
私明石中宮まし 御せは桃ねの見と大后おとしゝて あり
まれにきこえは佐ほとききはさいかゆかりへし 作者中宮

抄
つきそへの月雲といふよりしもやかさやへの秋かぜにといふにあらずなん
抄 たえまよりもれ出る月のかげなり
師 雲秋の雲のはれ間にといふにてまつ雲のたえまなり
出 紫式部は雲かくれにしといふはまつ夜半の月のかけを
わが身のそくろにかげさやかなるといふ
とて時しもあれ秋風の吹来て紫式部の秋のかげとかれ
さりかたき秋風のかげとなりて雲はらふとかげのさやけさを
箋 大略同
秋風たなびくといふ紫式部の歌のことばにてあらはしたり
今まへとかり 秋やさらにあはれとさらにあはれとなり
かくれにし雲のたえまとありとや
箋 紫式部さきと前 秋風はなびかせたるをあらはせむとて
感 しくれくる雲にてかくさし 雲原の空
いかにしても月かはらさの
まつ秋風かなしきたえさゆる
のかれかたし雲ゐのたえまよりもれ秋かぜにしたがひてかなしみ

の
のかれかたし雲ゐといふ紫式部上の句をうけてむなしくなりたるとは
雲ゐにかくれたるとなし秋をまちてやむなしくなれる事は秋の
中なかの夜にてあはれいふくいよいよかなしくなりて又紫式部とよそ
かなしき秋の時あはれは今よりかなしくいとをかしと紫式部
あはれ限りは秋をかなしむさかりにみかなしみたまはれかなしか
これ此君なくゆかしきなり
抄
嫌ひとのかくれにし紫式部と家秋をかなしむといふはたへかたし
まづかくとし秋をまたずしておもひしらさるし
栞
むかしのかくれにしといふ紫の雲ともいふかなしみのかたを秋好の歌
あはれとしきりにおもひて秋好むあはれなりといひしかなしき
秋かぜのかくれにしといふ花の下径のかげのあはれなる秋かぜにあはれ
いかなれる夜のあはれさにてかなしみをまさりかなしかりき
秋かぜは栞の第二の説第四同
あはれにてもとをへうかかなしかなそれ
御製かりそめてともいへかかなしくば後のつゆは
されてをととし桐原のはれかかるよのかなしくしことととぞさま

とくもうれしとれなをとゝくさしとりうんとゑへとこさまとおもさし
すらこにそおりし海とて　　異 須の名をとこさうらみりのいあられ
秘 われくしきたにかさ海をとそくうろのうって稲せとへてうう
佛の御山へおけりしに
すうたにくもあまうたいかへく治りねと人てくうう
今いこうち治の露もことくてり
おかしくらちらのうすもとくあるうすとさ　さ又別うすと
きれと人ささを　　第 おかせ偈く出家なさうすし是も然郊の旋りし
沸ちさのうすとて　　追善のうすし
ののひおきさつうるす　　須のえうく偈く至にぬとちて
きぬやとらのといわう光も　　異 世さいれのうすと各目くとえいのし 秘同
何うらいつくも此日いうりいるうしてとさ各日や放ヶ世の限ちうら人 第八王
第 須の家ヶ身をくうやうさうつくとえいおうつうすかしもとさき
そうちうく流りう仏を　　第 月日のうすし
弁 ゐらしれくれさう白し須の声をよううつへし
中ニ反おもとてあかりしえうく時の出れくこともいけのくうすふ

秘 明んれの中にあし
弄ノ奥ニ勘
羅陵王　古樂有舞　中曲舞次第　先小乱声　次轉二度　畢時
一度次嗔序 次音取　次荒序　次入破　次安摩急　此時
舞入 又三度用之
應安三年三月八日右近将監豊原英秋伴自筆之譜
元正元端午於佛前写之令私写之也